

焼き物と一緒に育った



小学校時代の私(左)。住み込みで働いていた職人さんとは兄弟のように過ごしていた

いだした。二重構造の湯飲みに「Made in Japan」の刻印をして輸出したことで一大ブームになったという。その頃は地元の問屋からの受注生産が主だった。出来上がった焼き物を竹かごに出して、それを並べると仕入れに来た問屋が選んでいく。現在のガス窯などに比べ、当時の伝統的な「登り窯」の精度では作品にばらつきがあった。

約8割が海外輸出だったのだが、1970年代の石油危機が全てを変えた。海外への輸出が止まってしまった。それに伴い、問屋からの注文も止まった。

それまでは問屋の注文通り作ればよかったのだが、窯元は焼き物を作るだけでなく、販売についても考える必要性に迫られた。全国の百貨店で開かれる物産展、ドライブインなどに商品を並べてもらうことや、観光ツアーで窯元に寄ってもらうようお願いするなどで、営業活動が必要になったのだ。

(聞き手 渡辺久男)

大堀相馬焼・陶吉郎窯窯主 近藤 学

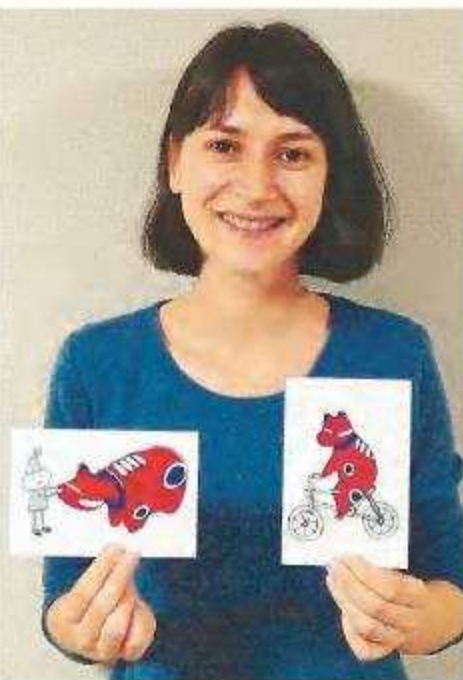


物心ついた時、焼き物は身近にあった。私は大堀相馬焼の窯元・陶吉郎窯の長男として生まれた。だが、将来実家を継ぐのだということは子ども心には思っていなかった。私が子どもの頃は徒弟制度だったので、中学校を卒業してきた若い人が何人か住み込みで働いていた。私には姉と妹がいたが、それらの職人さんたちとも夕食を共にし、兄弟のように育った。娯楽もなかったため、空き時間には一緒にキャッチボールを楽しんだ。住み込みの職人さんのほか、通いの職人さんや、工程ごとに手伝ってもらう人もいたので、自宅兼工房は朝から夜まで活気があった。大堀相馬焼の特徴の一つが、二重焼きという構造だ。これは、器にお湯を入れても冷めにくく、熱いお湯を入れても持つことができる。大堀相馬焼は私が育った環境同様、生活感と共に成長してきた陶器で、使いやすいように創意工夫を重ねてきた歴史がある。大堀相馬焼は太平洋戦争で打撃を受けたが、戦後の復興期、米国への輸出に活路を見

human

赤べこに恋した仏女性

にっこり笑った赤べこが自転車に乗り、鶴ヶ城を散歩中。かわいイラストの作者は、フランス出身の語学講師アケ・南口・エミリーさん(31)横濱市。会津旅行をきっかけに、「美しい福島のことをフランスの人にもっと知ってほしい」と赤べこのイラストを描き始め、インターネットでの情報発信や「赤べこグッズ」販売を通して、本県のアピールに力を入れている。



かわいらしい赤べこのグッズ制作を通し、福島の魅力を発信しているエミリーさん。イラストは独学で、「失敗したらやり直す」を繰り返して自分のイメージを表現する。赤べこの絵はがきや福島の地図などのセット「赤べこボックス」。地図にはエミリーさんが訪れた場所や行ってみたい場所など約30カ所が掲載されている

イラスト描きグッズ販売

「美しい福島知って」

エミリーさんが福島に興味を持ったのは2018(平成30)年。それまでは東京電力福島第一原発事故があったというところしか知らなかったが、本県出身の生徒から福島の話聞いて関心が高まり、同年夏に初めて南会津や会津若松市、五色沼などを旅した。赤べこを初めて見たのは奥磐梯のホテル。「実はあまりかわい



「当たり前前に過していた安全・安心な暮らしが、医療従事者のおかげで成り立っていると改めて気付かされた」。ウィルスという目に見えない恐怖と闘う精神力と使命感に敬意を表す。須賀川青年会議所として須賀川市の公立岩瀬病院にマスクを届けるなど「ありがとう」を伝える取り組みを模索する。「収束が読めないからこそ、自らウィルスについて学び、対策を講じることが重要」と語る。

鉄を使って木々、湖、人などを表現した作品を展示する安齊さん



温かみある鉄彫刻 喜多方 安齊さん作品展

鉄の彫刻家安齊重夫さん(71)いわき市は14日まで、喜多方市熊倉町雄国のギャラリー隠れ里で作品展を開いている。鉄で森、湖、川などを表現したオブジェなど約50点を展示している。鉄の彫刻家として40年以上活動する安齊さんは2018(平成30)年にフィンランドで個展を開いた際、森と湖の景色に感動し、鉄



初代竹宝齋から技術を受け継ぎ、3代目を襲名。素材の竹割りから完成まで全ての工程を一人で手掛ける。作品は、主に香合や籠など伝統的な形や中国から伝わった唐物に、独自のデザインを取り入れた。細部まで全て竹で作られた存在感のある作品がそろそろ。午前10時〜午後6時(最終日は同5時)。水曜日定休。問い合わせは同ギャラリー(電話0246・35・0008)へ。

医療現場に「エール」 自ら学び対策が重要



須賀川市 須賀川青年会議所理事長 熊田善友さん 39

「当たり前前に過していた安全・安心な暮らしが、医療従事者のおかげで成り立っていると改めて気付かされた」。ウィルスという目に見えない恐怖と闘う精神力と使命感に敬意を表す。須賀川青年会議所として須賀川市の公立岩瀬病院にマスクを届けるなど「ありがとう」を伝える取り組みを模索する。「収束が読めないからこそ、自らウィルスについて学び、対策を講じることが重要」と語る。

竹工芸香合や籠 独自のデザイン

島田竹宝齋さん展

京都の竹工芸師島田竹宝齋さんの展示会が15日まで、いわき市の小野美術で開かれている。良質の竹を用いた多彩な作品約70点が並ぶ写真。

を使い湖、川、海などを表現する新たな作品を生み出した。「硬い鉄で柔らかい水を表現する手法が加わり、作品の幅が広がった」と安齊さん。森の水辺にたえず男女の姿、水平線と雲で表現した海の景色、モビールのように天井から下り下げたオブジェなど、鉄なのに温かみを感じる作品が来場者を楽しませている。

午前10時〜午後5時。10日は休館。14日は安齊さんが来場している。問い合わせは同ギャラリー(電話0241・23・1638)へ。



©76, '20 SANRIO APPR. NO. G604163